
神を喰らう者

戸山 羅花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神を喰らう者

【Nコード】

N0040X

【作者名】

戸山 羅花

【あらすじ】

GE2も出るわけだし、ここらでいつとく？みたいな。多少ストーリーとズレあり。

プロローグ

建物の中は二段構造だった。一段目にはカウンターがあり、そこには受付の人がフェンリルの制服を着た人と話している。二階にはソファと机といった、ちょっとした休憩所のような雰囲気がある。端末のような装置も見える。

「……………ここが……………フェンリル極東支部……………」

手には適合検査の日程を知らせる紙とその検査を受けるための用紙。一階部分は一般開放されてるって話だけど一回も行ったことのない私は入り口周辺でうろろろしていた。

『あの、すみません』

「え？」

どうやら私の行動が気になったのか、受付の女の人が話しかけてくる。

「もしかして、適合検査を受けにきた……………」

「あ、はい。渡瀬わたせ深雪みゆきです」

「ああ、やっぱりそうですね！ 少々お待ち下さい……………。……………あ、支部長ですか？ はい、渡瀬さんが見えになりましたので……………はい、お願いしますね」

なにやらこの支部長と連絡をしている。女の方は通信を切るとこちらに向き直って言った。

「それでは、ご案内しますね」

案内されたのは広い訓練場のような空間。爪跡のような傷跡が壁にある。……………ちょっと怖い。

長く待たせてすまない。さて、ようこそ。人類最後の砦、『フェンリル』へ。今から『対アラガミ討伐部隊』、通称『ゴッドイーター』の適性検査を始めよう

そんな放送が聞こえてきた。上を見上げると、窓があつてそこに何人が人がいる。少しリラククスしたまえ、その方がいい結果が出やすい。……心の準備が出来たら、中央にあるケースの前に立つてくれ

放送の言うとおり、中央には赤い……ケースというよりは機械が置いてある。何が始まるのかは分からないけど、とにかく言われたとおり赤い機械の前に立つ。

腕を置く部分があるのが分かるかね？　そこに腕を置くだけだ

見ると、確かに直線に伸びたくぼみがあり、その先には仰々しい刃物の柄まで伸びている。

神機……いや、その柄を持って、腕を置いてくれ

言われたとおり、柄を持って腕を置く。……まさかこれで終わりとかじゃないよね……。

自分でもバカみたいな事を考えつつ待つこと数瞬。突然機械の上にあつた蓋のような、というか蓋が落ちてくる。

「……ッ、くうッ……！？」

蓋にもくぼみがあつたようで、押しつぶされることはなかったが何やら手首の部分が凄く痛い。そのまま数瞬、声も出せずに痛みに耐える。

しばらくして蓋が上がる。

「……？」

激痛の走つた手首には、何やら赤い腕輪が取り付けられている。

しかも金属製。

ふむ……。そのまま剣ごと腕を持ち上げてくれたまえ

剣は、思ったほど重くもなかった。腕輪も、金属でできている割にはそれほど重さを感じない。

すると、剣の黄色い部分から黒い紐のような物が伸びてきて、腕輪の穴が空いた部分に入り込む。

「んっ……んん？」

手首に違和感を感じるも、すぐに消えた。

おめでとう。君がこの支部初の、『新型ゴッドイーター』だ。次にメデイカルチェックがあるので、受付に戻るように。気分が悪いなどの違和感を感じたらすぐに申し出るように。……期待しているよ

「では、検査まであちらに座ってお待ち下さい」
受付に戻ると先程の受付の人が案内してくれる。

「はあ……。あの、これは……？」

「あ、検査票は検査の時に渡して下さい」軽く会釈をして席に座る。隣にはもう一人、私と同じように腕輪を付けて用紙を持った男の子が座っている。

緊張もあつて、微妙に背筋を伸ばして座っていると、

『ねえ、ガム食べる？』

「……？」

話し掛けられた。でも、それを会話のスタートに置くの？ もつと他の話題はないの？

「あ、切れてた。今ので最後だったみたい。ごめんごめん」

しかも自分で終わらせた。何この人。

「アンタも適合者なの？」

「あ、はい、そうですけど……」

「みた感じ俺と同じ年かちよつと年上っぽいけど、一瞬とはいえ俺の方が早かったし、俺の方が先輩ってことで。よろしく！」

「はあ……」

ホント何なのこの人。宜しくって、名前も聞いてないよ。

そこへ、白い服を来た女の人が出てくる。うええ……露出度高い人だなあ……。

「立って」

『へ？』

隣の男の子と八毛る。え？ この人今命令した？

「立てと言っている。立たんか！」

なんだか言葉に随分怒気を感じて、私と男の子は立ち上がる。

「私は、教練担当『雨宮ツバキ』だ。これからは、適合後のメデイカルチエック、基礎体力の強化、各種兵装の扱い方などのカリキュラムをこなしてもらおう。今までは守られる側だったかもしれないが、これからは守る側だ。つまらないことで死にたくなければ、私の命令には全てYESで答える。いいな？」

勢いに圧倒されて、突っ立ってしまふ。

「……分かつたら返事をしろ！」

『はっはい！』

「よし、まずは……渡瀬深雪、お前からだ。一五 までに榊博士の所へ行くように。それまで、この施設を回っていくといい。今日からお前達が世話になるフェンリル極東支部通称『アナグラ』だ。隊員に挨拶をしておくように」

それだけ言い残して、ツバキさんはさっさとどこかへ行ってしまう。

「……うっへー怖ええっ！ 何だあの人！」

「あはは……あ、私は見て回りたいし、失礼しますね」

「あ、そうなの？ じゃ、また後でな！」

元気良く言う男の子に手を上げて応える。

……結局あの男の子、何て名前だったんだろう……？

エレベーターの前にはそれぞれの階層によって違う名称になっている。部屋も支給されているので、チエックが終わったら行ってみよう。

「あ、君、新人君かな？」

「へ？」

エレベーターの到着を待っていると不意に後ろから声を掛けられ

た。

「私は楠リツカ（くすのきりつか）。神機の整備をする言わば整備士。勿論君の神機も診るから、よろしくね」

「あ、はいお願いします……」

「最初は慣れないこともあるだろうし、分からないことがあれば何でも聞いてよ」

「ありがとうございます」

「おい。お前らエレベーターの前で喋んな。邪魔だ」

今度はエレベーターの中から声がした。そちらを振り向くと白いスーツを来た男の人、それとジャケットを着た男の子がエレベーターから出てきた。

「お、カレル、こいつ新人じゃね？」

「何？ お前が例の新型ゴッドイーターってやつか。おいお前」

「は、はい」

「新型だからって調子乗ると、後で痛い目見るぞ。そこんとこ覚えとけよ？」

「そーそー！ 新型だろうが何だろうが、俺達の方が先輩なんだからよー！」

お前が言つな、と言ってジャケットを着た男の子の頭を叩くと、横を通り過ぎていった。

「ははは……あ、あの二人も紹介しとくよ。白い方がカレル・シュナイダー。ジャケットを着た男の子の方が小川シユン。あの二人、もうちよつと素直になればね……」

「あはは……。あ、そつだ。一つ聞いてもいいですか？」「ん？ 早速質問？ 何かな？」

「あの……メデイカルチェックってどこで受ければ？」

「え？ ツバキさんに聞いてないの？ まあいいか。ついてきて。案内してあげるよ」

「分かりました」

階層の名前はラボラトリ。その最奥がメディカルチェックをしてくれる榊博士と言う人がいる部屋らしい。

「じゃあ私はメンテナンスがあるからこれで。あ、榊博士ってちょっと変わってるけどいい人だよ。それじゃ、またね」

「あ、はい。ありがとうございます」

リツカさんはエレベーターに戻るとさらに下の階層へ向かった。

「変わってるっていつてたけど……どんな人なんだろう……」と
にかく、最奥の部屋へ進みドアをノックする。

『ああ、入っていいよ』

中から声がして、扉が開く。

「ふむ……。予想より423秒も早い。良く来たね。新型君。私はペイラー・サカキ。アラガミ技術開発の統括責任者だ」

ペラペラと長い肩書きを話す榊博士。周りにあるたくさんディスプレイを見ると、博士というより技術者みたい。

「さて、見ての通りまだ準備中なんだ。ヨハン、先に君の用事を済ませたらどうだい？」

「榊博士、そろそろ公私のけじめを覚えていただきたい」

あ、この声、さっきの検査の時の……。

「適合検査、ご苦労だった。私は、ヨハネスフォン・シックザール。ここフェンリル極東支部を統括している。……あらためて、適合おめでとう。君には期待しているよ」

「はあ……」

「彼も元技術屋なんだよ。ヨハンも新型のメディカルチェックには興味津津なんだよね？」

「あなたがいるから廃業することにしたんだ……自覚したまえ」

「ホントに廃業しちゃったのかい？」

何だろ、この二人。上司と部下っていうより……ライバルみたいな……？

「フツ……さて、ここからが本題だ。改めてここフェンリル極東支

部の仕事を説明しよう。君の直接の任務は当該地域のアラガミの撃退と素材の回収だが……それら全ては、ここ前線基地の維持と、来るべきエイジス計画を成就するための資源となる」

「この数値はっ！」

突然、榊博士が声を上げる。

「……エイジス計画とは、この極東支部の沖合い、旧日本海溝付近にアラガミの脅威から守られた『楽園』をつくるという計画だが……」

……」

「ほおおっ！」

「この計画が完遂されれば、人類は当面の間、絶滅の危機から遠ざけられるはず……」

「凄い！これが新型かつ！」

「……ペイラー。説明の邪魔だ。見たまえ、彼女も必死に笑いを堪えている」

「言わなくていいです。」

「いやあゴメンゴメン。ちょっと予想以上の数値に舞い上がっちゃったんだ」

「……ともかく人類の未来の為だ。尽力してくれ。じゃあ私は失礼するよ。ペイラー。終わったらデータを送って置いてくれ」

そういつてシツクザール支部長は部屋を出て行く。

榊博士は手を振って見送ると、キーボードを打つ手をやめ、向き直る。

「さて、検査を始めるよ。そこに横になってリラックスしたまえ。」

少しの間眠くなると思うが心配しないでもいいよ。次目が覚めるときは自分の部屋だ。戦士のつかの間の休息というやつだね。予定では10800秒だ。ゆっくりお休み」

目が覚めると、先程の研究室ではなかった。

「誰かに運ばれたのかな……」

榊博士じゃないよね……。怖いけど、余計な詮索はやめておこう。改めて部屋を見回してみる。今私が寝かされていたベッド、机とソファー、それに流しに冷蔵庫まである。以前まで住んでいた外部居住区とは偉い違いだ。

「そういえば……写真も入れてきたんだっけ」

極東支部に配属されるまえに荷物を運び込むことがあった。その私物の中に家族の写真もあったはず。

「やっぱり、これだ……」

お父さんとお母さん、それと私の三人家族で暮らしていた。周りは片親とか、下手すると孤児の子供もいたから、うちは幸せな方だったと思う。学校帰ればお父さんもお母さんも待っていたし。

「ツバキさんも言ってたもんね」

今まで私を守ってくれたお父さんとお母さんを、今度は私が守ってあげる番なんだ。

そう思うと、この一人きりの部屋でも頑張れそうな気がした。

「おっじゃまー！」

「ひゃあっ!？」

ノックもなしに男の子が入ってくる。

「あれ？ まだ荷物片付けてないの？」

「の、ノックくらいして下さい！」

「え？ ああ！ ごめんごめん！ 次から気を付けるよ！」

「全く……あ、それより、まだ名前言ってませんでした。私渡瀬深雪って言います。E25出身です」

「E25!？ オレの実家の隣の地区じゃん！ すっげー偶然！」

「……それで、貴方は……？」

「おお、そうだった。オレは藤木コウタ（ふじきこうた）！ 改めて宜しく！」

コウタ君が手を差し出す。それを無視して話を進める。

「それで、なんでコウタ君が私の部屋に？」

「スルーなのね……。だって、部屋隣だし、やっぱり挨拶は大事なかなーと」

「隣!？」

「え? 何? オレなんか変なこと言った?」

慌てて外に出て、隣の部屋を確認する。左は空き室だったが、右にはプレートに確かに『藤木コウタ』と書かれている。

「……な? 隣っしょ?」

「次から鍵を掛けなくちゃ……」

「え? なんで警戒レベル上がってんの?」

特に夜は二重ロックくらい……。

「そーそー、何かツバキさんだっけ? そんな人が神機の使い方をレクチャーするってんで、十分後にエントランスにこいつてさ」

「エントランス?」

「ほら、最初にオレ達が会った所だよ」

「ああ……」

エントランスっていうんだ……。

「さあ、さっさと行こうぜ!」

「ま、待って下さい! 私、この服じゃちょっと……」

「え? あーまあ確かに……」

検査だけかと思っていたので、動きやすい服装ではない。しかも下はスカートなので落ち着かない。

「ちよつと私、着替えてきますね」

「おっけ。じゃあ自販機の前で待ってるよ」

急いで部屋に戻り、部屋の端末にアクセスする。

「着替えてどれで出来るの……」

いきなり壁にぶち当たった。ガチャガチャいじってみると、何やら装備変更という画面が出てくる。

「もしかして、ここからかな……」

装備変更の項目でエンターを押すと、何やら銃を持った私が写し出される。

「あ、一番下がそうみたい」

トップスの項目でエンターを押すと支給品のフェンリルの制服がいくつか表示される。

「とにかく何でもいいから変えないと！」

一番上『F制式上衣 カーキ』そしてボトムスは同じく『F制式下衣 カーキ』を選択して決定する。

「わっ」

突然ターミナルの横から厚い金属板が出てきて、そこに先程選択した上衣と下衣が掛けられている。さらに下からも金属板が出てきてターミナルを囲んだ。

「ここで着替えるってこと？」

別に部屋なので気にはしないがちょっと驚いた。着替えた私服は……部屋に置いておいた方がいいよね。

もう一度エンターを押すと金属板は下がり、部屋が見える。

「よし、急がなきゃ！」

そう呟いて、コウタ君が待つエレベーターの所へ向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0040x/>

神を喰らう者

2011年9月25日01時52分発行